

# 「各教科等で育てたい国語力」と 「学びの技」により力を育む

## 秋田県 横手市立十文字第一小学校

「かわり合って学ぶ子ども」の育成」をテーマに研究を進める横手市立十文字第一小学校。目指す子ども像に迫るために、「各教科等で育てたい国語力」を明確にし、そのために有効な言語活動を選択することで学びの質の向上を図っている。

### 課題

- 他者や資料とのかかわり合いの中で学びを深められない
- 子どもがこれまで身に付けてきた言語能力を高めていく場として、言語活動を充実させる必要があった

### 研究のねらい

- 学びを深める、目指す子ども像に迫るために、各教科等で付ける力を明確にし、言語能力を高め、言語活動を充実させる

### 実践

- 育成すべき力を「考える力」「感じる力」「想像する力」「表す力」から成る国語力と設定。各教科等に落とし込んだ「各教科等で育てたい国語力」の一覧表を作成。その実現のために言語活動を併せて書き込む
- 全教科に応用できる考え方などのコツを「学びの技」として子どもから抽出し、系統的に整理

### 成果

- さまざまな視点や考え方に共感したり、比較したりしながら、自分の考えを深められるようになった
- 言語活動を考える過程で目指す子ども像が明確になり、身に付けたい力を再確認できた

### S c h o o l D a t a

◎1877（明治10）年開校。2007年度より2年間、文部科学省の国語力向上モデル事業推進校の指定を受ける。以来、児童の言語能力育成のための授業づくりに力を注ぐ。



校長 西野 茂先生

児童数 451人 学級数 16学級（うち特別支援学級2）

所在地 〒019-0523 秋田県横手市十文字町字十文字48

TEL 0182-42-1020

URL なし

公開研究会 未定

## ◎課題と研究のねらい

### 他とかかわり合う中で 学ぶ子どもを育成

十文字第一小学校では、「かかわり合っ  
て学ぶ子どもの育成」言語活動の充実を通して  
「」をテーマに、友だちの意見や資料など自  
分以外の考え方に触れ、かかわることで、学  
びの質を高め、確かな学力を身に付けられる  
子どもの育成に取り組む。研究主任の小坂靖  
尚先生は、次のように説明する。

「私たちが考えを深めたり新しい発見をし  
たりするには、他人の意見を聞いたり質問さ  
れたり、教材と向かい合ったりすることなど  
が不可欠です。そこで、考えを伝え合う、相  
手の考えを聴き合うなどといった言語活動が  
必要になるのです」

同校では、2007年度から2年間、文部  
科学省による国語力向上モデル事業推進校の  
指定を受け、国語力の研究を進めてきた。西  
野茂校長は、子どもの変容について次のよう  
に話す。

「地域性もあり、本校の児童は進んで取り  
組んだり、積極的に発言したりする力は弱い  
です。しかし、これまでの取り組みを通して、  
資料を基に自分の考えをまとめたり、それら  
を踏まえて自分の意見を発表したりすること  
は出来るようになってきました」

10年度は、自分の考えを更に深める場とし  
て、言語活動を全教科の授業で充実させるこ  
とが必要だと考えた。

## ◎実践

### 全教科について 育成すべき国語力を設定

同校では、07年度、学校の実態に則して次  
のように目指す子ども像を決め、教師間で共  
通理解を図ることから研究を始めた。

◎書かれてあることや友達の考えと、自分と  
のつながりを見つけて考えることができる  
子ども

◎言葉に関するアンテナを高く、広くもち、  
豊かな感性をもつことができる子ども

◎自分の考えの根拠をもって表現し伝えるこ  
とで、よりよいコミュニケーションを成立  
させることができる子ども

次に、この子ども像に迫るために身に付け  
させたい力を「考える力」「感じる力」「想像  
する力」「表す力」から成る国語力として、低・  
中・高学年ごとの発達段階に応じて具体化し  
た。参考にしたのは、文化審議会の答申「こ  
れからの時代に求められる国語力について」  
（\*）だ。

更に、付けたい力を授業に具体的に落と  
し込むために、「各教科等で育てたい国語力」



横手市立十文字第一小学校校長  
**西野茂** Nishino Shigeru



横手市立十文字第一小学校  
研究主任  
**小坂靖尚** Kosaka Yasuhisa



横手市立十文字第一小学校  
**小松尚子** Komatsu Naoko



横手市立十文字第一小学校  
3学年主任  
**石井信恵** Ishii Nobue



横手市立十文字第一小学校  
2学年担任  
**高橋美喜子** Takahashi Mikiko

としてまとめた（図1）。これには、国語力  
が表れる場としての言語活動と、目指す子ど  
もの具体的な姿も書かれている。この理由を、  
教育専門監の小松尚子先生は次のように説明  
する。

「国語力は、国語科だけではなく、『すべて  
の教科等の毎日の授業で養うものである』と

\* 文化審議会の答申は、文部科学省のウェブサイトでご覧いただけます  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/bunka/toushin/04020301.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/bunka/toushin/04020301.htm)

# 何のため？ 各教科での言語活動

図1 各教科等で育てたい国語力(国語、算数の抜粋)

	考える力	感じる力
国語	<ul style="list-style-type: none"> <li>何がどのように書かれてあるのか比べたり評価したりしながら読み取る力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>言葉のもつ味わいとらえる力</li> </ul>
算数	<ul style="list-style-type: none"> <li>既習の内容を使って新しい問題を考える力</li> <li>複数の図や式の共通点や相違点をとらえる力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>簡潔に解決できる方法を見極め、算数の美しさを感じる力</li> <li>考えや発言の微妙な違いを感じる力</li> </ul>
	想像する力	表す力
国語	<ul style="list-style-type: none"> <li>様子を表す言葉から、文章に表されている場面や心情を思いうかべる力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>立場や自分の考えを明確にして意見を表す力</li> </ul>
算数	<ul style="list-style-type: none"> <li>友達の図・式・言葉からどんなふうにかいたのかを思い描いたり、数・図・式・言葉をお互いに関連づけたりする力</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>数・図・式・言葉で自分の考えをかいいたり説明したりする力</li> <li>算数用語の意味を考えながら説明の中で使う力</li> </ul>

\* 同校の資料を基に編集部で作成。表全体は、小誌ウェブサイトでご覧いただけます  
<http://benesse.jp/berd/> →HOME>情報誌ライブラリ(小学校向け)

図2 「学びの技」系統表(「聞くこと」の一部抜粋)

1年	2年	3年	4年	5年	6年
聞き取り	聞き取り	感想・質問	感想・質問	自分に置き換えて聞く	自分に置き換えて聞く
<ul style="list-style-type: none"> <li>相手の目を見る</li> <li>うなずき</li> <li>大事なことの聴取</li> <li>分からないことや詳しく聞きたいことを考えながら</li> <li>感想</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>最後まで聞く</li> <li>前後をよく考えながら</li> <li>様子を思い浮かべながら</li> <li>1つ1つを覚えながら(メモ・指を折りながら)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の経験との結びつき</li> <li>妥当性の判断</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の考えとの共通点や相違点</li> <li>話の要点</li> <li>聞き返し</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の考えへの取り入れ</li> <li>似た経験はないか</li> <li>話題のとらえ方の違いや共通点、差異点を明確に</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>資料や友達との思考との比較</li> <li>思考の再構築</li> </ul>
				想像しながら聞く	想像しながら聞く
				<ul style="list-style-type: none"> <li>話し手の思いをとらえながら</li> <li>規則性の発見</li> <li>必要な情報を取捨選択</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>話し手の意図をとらえながら</li> <li>帰納的、演繹的に</li> </ul>

\* 同校の資料を基に編集部で作成。他の項目を含む表全体は、小誌ウェブサイトでご覧いただけます  
<http://benesse.jp/berd/> →HOME>情報誌ライブラリ(小学校向け)

「子ども自身が発見した『学びの技』を授業で活用」

目指す力を付けるために、教科が異なっても応用できる考え方や表し方などのコツを、同校では「学びの技」と呼んでいる。これは、子ども自身が授業中に見つけたものだ。

「全教科で言語活動を行う中で、子ども自身が、ある教科で学んだことが他教科の授業でも使えると気づいたのです」(小松先生)

08年度には、それまでの蓄積を発達段階に沿って「『学びの技』系統表」として整理し

た(図2)。ただし、実際に活用する際には、「技」の名前は学年ごとに異なるという。3学年主任の石井信恵先生は次のように説明する。

「子どもから出てくる『学びの技』は、基本的に子どもの言葉のままにしています。例えば、2年生の、聞き取って理解する時の技の一つである『様子を思い浮かべながら』ということ、子どもは『頭の中のビデオで再生する』と表現しました。子どもらしい表現で、私たちの感覚では出てこない言葉ですが、子どもたちにとってはこの方が分かりやすいと考え、そのまま活用しています」

「学びの技」の中で重要なものは、学び方につまずいた時などに確認できるよう、各教室の壁面に貼り出し

## 教科のねらいに到達するための適切な言語活動を選択

同校ではこれらの実践を基に、次のような過程で授業をつくる。まず、教科のねらいや年間計画から本時のねらいを設定。そして、「各教科等で育てたい国語力」と照らし合わせ、その授業で付けたい国語力として具体的にイメージ。適切な言語活動を選択する。言

である。新たな技を発見したら、その都度掲示を増やすなど、学級ごとに工夫して活用している。

語活動では、「『学びの技』系統表」を参照し、6年間の学びの系統性に配慮しながら、使える技、身に付けさせたい技を取り入れる。

言語活動が効果的な学びの場になるように、日々の授業の運営、研究会の進め方も工夫する。まず、授業の進行では、発言しやすいう雰囲気づくりを心がける。友だちが良い意見を言ったらきちんと評価する習慣を付けたり、「分からないことや詳しく聞きたいことは聞く」という「学びの技」に沿って、聞きやすい雰囲気をつくったりする。互いの考えを深めるためには、異なる意見や反対意見も受け入れることが大切だと理解させ、子どもが気兼ねなく発言、交流できるような指導を日常的に行っている。

授業研究では、少人数でのグループ協議など、教師全員で取り組む体制づくりに配慮する。また、日常的に短い時間で実践を共有するなど、相談しやすい環境がつけられている。「先生方にも、指導に得手・不得手があります。気軽に悩みを相談できることが大切だと思います」（西野校長）

## ◎成果

### 相手に共感しながら 考えを深められるように

子どもの変化について、小坂先生は次のよ

うに話す。

「授業中、自分の意見に対して多くの反対意見が出された子どもにも『反対意見が出たことで考えは深まらなかった?』と聞くと、『深まった。別のことを言おうと思って、すぐ考えた』と答えました。友だちの考えとつながりを見つけて考えられる、目指す姿に近づいていると嬉しい驚きでした」

自分の考えを根拠と共に述べたり、他者と良いかかわりが出来たりするようにもなってきた。

「特活で何の活動を行うか話し合った時、始めは『ドッジボール』『フルーツバスケット』など、好き嫌いで意見が出されるだけでした。そこで、『Aに比べてBはこうだからAが良いという言い方をしてみよう』と提案すると、『かけっこドッジボールを比べるなら、友だちと協力できるドッジボールが良い』というように、発言が変わっていきました」（石井先生）

「一人が良い発表をすると、自然に拍手がわいたり、『いいね』という声が出るようになりました。人の意見をきちんと理解し、素直に評価する姿勢が出来てきたのだと思います」（2学年担任の高橋美喜子先生）

「学びの技」の効果も大きい。

「『学びの技』が別の場面でも活用できるかを意識することを促すうちに、子ども自ら『学びの技』が書かれている掲示の方を振り

返り、確認するようになりました。技の活用が習慣として定着し、目指す力を付けるための手段となっていると感じます」（石井先生）

言語活動の充実は、授業の改善にも効果があると、小松先生は感じている。

「言語活動を取り入れる過程で、育てたい子ども像を具体的にイメージします。各教科で付けたい力もより明確になり、授業をどう改善すべきか見えてきます」

学びの伝統を引き継いでいくことを大切に  
する同校。更なる改善を重ねながら、研究が  
進められていく。

## 西野校長が重視する

### 校長としての役割

先生方一人ひとりが十分に力を発揮できる環境づくりを大事にしています。そのため、「まずやってみましょう」という姿勢を大切にしながら、困ったことや問題があったら、まず私が誠意を持って対応に当たり、バックアップしていきたいと考えています。

今後、社会に出ていく子どもには、世界を相手にする機会が更に増えるでしょう。その時、自分が何を考え、相手に何を提供できるかを、きちんと説明できることが重要になるはず。私たちは、そのような子どもを育てていきたいと思っています。

# 何のため？ 各教科での言語活動

## 2年生 言語活動を取り入れた道徳の授業づくりのプロセス

主題 「助け合う友達」

授業者 高橋美喜子先生

児童数 31人

### 1 ねらい

友達と互いに仲良く助け合い、励まし合っていこうとする心情を育てる

### 2 ねらいに向かうための国語力を確認

「育てたい国語力」を参照し、本時に重視する国語力を確認。更に「『学びの技』系統表」を参考に、本時で生み出したい「学びの技」を検討。「相づちを打ちながら」聞く、「はきはきと」話すなどを考えた。

図3 各教科等で育てたい国語力(道徳の抜粋)

	考える力	感じる力
道徳	資料と対話したり友達の意見を聞き参考にしたりしながら、自分を見つめる力	資料の登場人物や友達の気持ち、立場に共感する力
言語活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>話し合い</li> <li>学習シートへの書き込み</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>話し合い</li> <li>資料の読み</li> </ul>
	想像する力	表す力
道徳	資料や友達の言葉から、思いを察する力	自分を見つめたことを伝える力
言語活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>吹き出し</li> <li>挿絵の説明</li> <li>動作化</li> <li>役割演技</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>手紙、お礼状、招待状</li> <li>吹き出し</li> <li>行動の記録表</li> <li>心のノート</li> </ul>

\* 同校の資料を基に編集部で作成。表全体は小誌ウェブサイトでご覧いただけます  
<http://benesse.jp/berd/> →HOME>情報誌ライブラリ(小学校向け)

今回は、以下について重きを置くと考えた。

#### 考える力

資料と対話したり、友達の意見を参考にしたりしながら、自分を見つめさせる

#### 感じる力

相手の気持ちや立場に共感させる

#### 想像する力

資料や友達の言葉から、思いを察することができるとさせる

### 3 ねらいにせまるための言語活動を選択

ある動物が他の動物とのかかわりを通じて、自己中心的な気持ちに変化していく物語を読み、動物たちの心情を話し合わせる。話し合いの中で、話し手が安心するように、「相づちを打つ」ことが大切だと考えて指導。子どもはこの技を「うんうん」と呼ぶ。登場する動物の心の動きに対して、子どもたちの素直な気持ちや言葉をより引き出すために、「役割演技」をさせた。

また、授業を通して考えたことを表すために、登場する動物にあてた「手紙」を書かせた。



友だちの発表は真剣に聞き合う。発表の内容を聞いて、拍手をしたり、「すごいね」と賞賛したりするなど、認め合う雰囲気が出来てきた

### 4 研究会での検討観点と授業の振り返り

- 1 ねらいに向けた適切な言語活動だったか
- 2 子どもの実態に則した心に響く資料選択、資料提示、資料活用だったか

- ・ 6人前後の小グループに分かれ、上記の観点でグループ協議を実施。その後、全体協議を進めた。ねらいに到達しているかどうかは、子どもたちに書かせた手紙を見て検討した。
- ・ 結果として、言語活動として「役割演技」を取り入れることで、子どもたちはさまざまな登場動物の心情に共感し、考えることが出来た。また、周りの子どもの発見に対し、「そうも考えられるんだ」という声が自然に上がり、友だちとのかかわりが深まった。
- ・ 「役割演技を取り入れたことで、書いたものを発表するのは異なる素直な言葉をたくさん引き出すことが出来ました。資料や友だちの考えを基に考える力を付ける上で、有効だったと思います。『学びの技』についても『〇〇は使えるね!』という声から出てくるようになり、嬉しく思います」(高橋先生)

\* 同校の10年度「第2学年1組 道徳学習指導案」を基に編集部で作成